



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 漱石の落語                                                                       |
| Author(s)    | 恩田, 雅和                                                                      |
| Citation     | 阪大近代文学研究. 2007, 5, p. 1-11                                                  |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/92643">https://doi.org/10.18910/92643</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 漱石の落語

恩田 雅和

## はじめに

夏目漱石が小説作品中に落語の一節を取り入れたり、また落語の影響下で残されたと思われる作品のあることは、つとに興津要『日本文学と落語』<sup>(1)</sup>、水川隆夫『増補漱石と落語』<sup>(2)</sup>などで指摘されている。

ここでは、これらの先行研究と重ならない部分で、漱石の作品と落語との関わりを考察したい。

## 1

「江戸文学や田遊を代表とする滑稽落語の手法が、縦横に駆使された」<sup>(3)</sup>『吾輩は猫である』の「ホトトギス」連載を一九〇六（明治三十九）年八月に終えた漱石は、その年十月、「二百十日」を「中央公論」に発表した。この小説にも、漱石は落語からの引用を試みている。

登場人物の豆腐屋の子圭さんとその友人碌さんが阿蘇登山する内容の話だが、全編ほとんど二人の会話だけで進行されている。この会話については、すでに「正宗白鳥は、『読売新聞』（明治三十九年・一九〇六・十月十日付）の「文芸時評」で、『二百十日』は多忙なる為未だ通読せず、初二三枚を読みしただけにては、田遊の落語然たるを感じたり」といつているが、まさしくこの会話は、幼少の頃の漱石が通っていた馬場下の豆腐屋の隣の寄席や、日本橋瀬戸物町の寄席伊勢本の記憶の再現以外のなものでもない」<sup>(4)</sup>と、江藤淳が正宗白鳥の同時代評を引き合いに出して論じている。

漱石自身も、『二百十日』三章で、

「何だか要領を得ないな。君、半熟を命じたんぢやないか。君のも生か」と圭さんは下女を捨てゝ、碌さんに向つてくる。

「半熟を命じて不熟を得たりか。僕のを一つ割つて見やう。——おや是は駄目だ……」

「うで玉子か」と圭さんは首を延して相手の膳の上を見る。

「全熟だ。こつちのはどうだ。——うん、是も全熟だ。」

——姉さん、これは、うで玉子ぢやないか」と今度は碌さんが下女にむかふ。

「ねえ」

「さうなのか」

「ねえ」

「なんだか言葉の通じない国へ来た様だな。——向ふの御客さんのが生玉子で、おれのは、うで玉子なのかい」

「ねえ」

「なぜ、そんな事をしたのだい」

「半分煮て参りました」

「なある程。こりや、よく出来てらあ。ハハハハ、君、半熟のいはれが分つたか」と碌さん横手を打つ。

「ハハハ、単純なものだ」

「丸で落し断見た様だ」

と、「落し断」という言葉を使い、下女を交えた会話が、落語口調であることを明かしている。

二章では、圭さんと碌さんが湯に入つての会話が続く。

「なある程、銭が一文もないんだね」

「一文もないのさ」

「君どうした」

「仕方がないから、襦衣を敷居の上へ乗せて、手頃な丸い石を拾つて来て、こつこつ叩いた。さうしたら虱が死なないうちに、襦衣が破れて仕舞つた」

「おやおや」

「しかも夫を宿のかみさんが見付けて、僕に退去を命じた」

「嘸困つたらうね」

「なめに困らんさ、そんな事で困つちや、今日迄生きて居られるものか。是から追ひ追ひ華族や金持ちを豆腐屋にするんだからな。滅多に困つちや仕方がない」

「すると僕なんぞも、今に、とおふい、油揚、がんもどきと怒鳴つて、あるかなくつちやならないかね」

「華族でもない癖に」

「まだ華族にはならないが、金は大分あるよ」

「あつても其位ぢや駄目だ」

「此位ぢや豆腐いと云ふ資格はないのかな。大に僕の財産を見絀つたね」

ここで碌さんが言っている「とおふい、油揚、がんもどき」というセリフには、落語の中でよく聞かされるオチの部分がある。

甲州から出てきた若い男が一生懸命に働いて豆腐屋の婿養子になる「出世の島台」(別題「甲府い」という落語がある。この落語のオチは、若夫婦が親の法事と身延山のお礼参りと

で甲府に帰ろうとするとところである。六代目桂文治口演の速記⑤を見てみよう。

甲「源兵衛さん、御覧なさい御覧なさい。豆腐屋の若夫婦は縁日にも行かないが、今日は二人揃つて」

乙「成ほど、コリヤア珍しいナ。ヲーイ豆腐やの若旦那、どちらへ御出でなさるんでございます」

善吉がふりむいて

「甲府イー（豆腐イ）」

お孝が

「お参り願ほどもき（胡麻入がなんもどもき）」

「甲府イ、お参り、願ほどもき」つまり「豆腐イ、胡麻入、がなんもどもき」と言う善吉、お孝夫婦のセリフを碌さんは胡麻入を油揚げに替えて言っていた。

このように、漱石はかつて寄席で聞いたか、あるいは「百花園」の速記を目にしていたか、落語「出世の島台」のオチをここに挿入していたのだ。

そればかりではない。四章の阿蘇山中で、圭さんが火焙岩の谷の中に落下した場面である。

「おゝゝい」と痼の高い声を、肺の縮む程絞り出すと、太い声が、草の下から、

「おゝゝい」と応へる。圭さんに違ない。

碌さんは胸まで来る薄を無暗に押し分けて、ぶんぶん声のする方へ進んで行く。

「おゝゝい」

「おゝゝい。どこだ」

「おゝゝい。ここだ」

「どこだあゝ」

「ここだあゝ。無暗にくるとあぶないぞう。落ちるぞう」

「どこへ落ちたんだあゝ」

と、碌さんと圭さんのやりとりは続き、しまいに碌さんは蝙蝠傘の曲がつている柄に解いた兵児帯を結びつけて、谷の下の圭さんにぶら下げる。圭さんはこの兵児帯を握りしめて、谷底からかけ上ろうとする。

毛縷子張り八間の蝙蝠の柄には、幸ひ太い瘤だらけの頑丈な自然木が、付いてあるから、折れる気遣は先づあるまい。其自然木の彎曲した一端に、鳴海絞りの兵児帯が、薩摩の強弓に新しく張つた弦の如くぴんと薄を押し分けて、先は谷の中にかくれてゐる。其隠れて居るあたりから、しばらくすると大きな毬栗頭がぬつと現はれた。やつと云ふ声と共に両手が崖の縁にかゝるが早い、大入道の腰から上は、斜めに尻に挿した蝙蝠傘と共に谷から上へ出た。同時に碌さんは、どさんと仰向きになつて、薄の底に倒れた。

圭さんが谷底に落ちた後の碌さんとのやりとり、さらに底から上にあがるシーンは、落語「愛宕山」の最後の場面を想起させる。

この落語「愛宕山」の適当な活字本が見あたらないため、上方落語の『米朝落語全集』第一巻<sup>⑤</sup>より援用する。旦那のお供で愛宕山に上った幫間の一八は、旦那が土器の替わりに小判を的に投げ、結局谷底まで三十枚も捨ててしまったのを惜しく思った。そこで傘を使って谷へ飛び下り、小判を拾おうとする。

旦那「飛びよった、飛びよった。おい一八」

一「へー」

旦那「飛んだかよー」

一「へー」

旦那「聞こえてんのかいな、けがはないかよー」

一「けが、けが、けが、けが……（目を開けて気づく）」

飛びましたア」

旦那「今気がつきよったんやあいつ、けがはないかー」

一「けが、……けがはどこにもございませーん」

と一八は上にいる旦那と大声でやりとりするが、ふと上にあがる方法がないことに気がつく。

苦しまざれというのは知恵の出すもんでバツと着物を脱ぎますと腐っても太鼓持ち、下には別染めの長襦袢、ツーツと横糸をはずしまして、ツーツツーツ、細く裂きますとそれで絹糸の縄をないだした。長い長い縄をのうてはつぎ足し、のうてはつぎ足し、

「ちよっと待っとおくなはれや。行たらあきまへんで、

もうじきでつきかいな」

長い長い縄がでけますと、その縄の端に手ごろな石をぐるぐる巻く巻きつけますと、ピューピューと振り回しだした。あのへんのこの崖のところには嵯峨竹という横だおしになったように長い大きな竹が生えておりまして、ピューピューと充分に回したところでキリキリキリとこいつにも巻きつけた。

「ウーン、こ、こう、これをもうちよっと」（竹をたわめるシグサ）充分に竹をたわめといて、ポンと一つつけますと、ツツツツツツツ、

一「へい、旦那、ただいま」

旦那「上がつてきよった。えらい奴やな。ようお前上がってきたなア、ほいで金は」

一「ああ、忘れてきた」

一八は傘を谷に下りるのに使い、上がるのには長襦袢を裂いて縄にし竹に巻きつけて自力で上がった。傘に兵児帯を付けて碌さんが引つ張り上げた圭さんとは異なるが、谷底に落ちて上がるということで、圭さんと一八の行為は近似している。

『全集』の解説で桂米朝は、「愛宕山」について「東京でも故桂文楽師の名演がございましたが、これは三代目円馬師が東京へ移したもので、元来は上方噺です。」と述べている。

この三代目三遊亭円馬については、明治四十三年頃に実際に稽古をつけてもらった三遊亭円生の思い出話<sup>⑥</sup>が残って

いる。それによると三代目円馬は、七歳で京都京極笑福亭で初舞台を踏み、十三歳で立花家橘之助門に入り、橘松となった。その後日露戦争に出征して帰ってから花橘と改名、二十八歳の時には立花家左近となり、この頃十歳で橘家円童を名のつていた円生によく稽古をつけていた。住んでいた所が、漱石が好んだ鼻の円遊こと三遊亭円遊の貸家で、そんな縁もあったのだろうか、漱石は、円馬になる以前の橘松か花橘が演じた大阪からの移植ネタ「愛宕山」を聞いていた可能性がある。

## 2

「二百十日」を書いた翌年一九〇七（明治四十）年一月に、漱石は今度は「ホトトギス」に「野分」を発表した。元教師で文筆業の白井道也とその教え子で窮乏している高柳周作、それに高柳の友人で恵まれた家庭に育った中野輝一の三人が主な登場人物である。

この小説のエンディングは、健康を害した高柳が中野から転地療養費として借りた百円を、金銭で苦労している師白井宅に、道也の原稿を買い上げる名目で無理矢理置いて帰るところである。

「此原稿を百円で私に譲つて下さい」  
「其原稿? : : :」

「安過ぎるでせう。何萬円だつて安過ぎるのは知つてゐます。然し私は先生の弟子だから百円に負けて譲つて下さい」

道也先生は茫然として青年の顔を見守つてゐる。

「是非譲つて下さい。——金はあるんです。——ちゃんとこゝに持つて居ます。——百円ちゃんとあります」

高柳君は懷から受取つた儘の金包を取り出して、二人の間に置いた。

「君、そんな金を僕が君から : : :」と道也先生は押し返さうとする。

「いゝえ、いゝんです。好いから取つて下さい。——いや間違つたんです。是非此原稿を譲つて下さい。——先生私はあなたの、弟子です。——越後の高田で先生をいぢめて追ひ出した弟子の一人です。——だから譲つて下さい」

愕然たる道也先生を残して、高柳君は暗き夜の中に紛れ去つた。

このエンディングは、三遊亭円朝の落語「文七元結」中、吾妻橋の件によく似ている。左官の長兵衛が吾妻橋から身投げしようとする文七を助け、店の金百両を紛失したと聞かされたところから、娘が吉原で作つたばかりの百両を文七に与える場面である。

長「実は此処に百両持つてゐるが、これはお前のを奪つた

んぢやアねえぜ、己は斯んな嬢の着物を着て歩く位の貧乏世帯の者が百両なんて大金を持つてる氣遣はねえけれど、己に親孝行な娘が一人有つての、今年十七になるお久てえ者だが、今日吉原の角海老へ駆込んでつて、親父が行立ちませんから何うか私の身体を買つておくんない、親父への意見にもなりませうからつて、娘が身を売つて呉れた金が此処に在るんだが、其身の代をそつくりお前に遣るんだ、己ん処の娘は、泥水へ沈んだつて死ぬんぢやアねえが、お前は此処から飛び込んで本当に死ぬんだから、此れを遣つちまふんだ。其代り己は仕事を為て、段々借金を返して往つた処が、三年かゝるか、五年掛るか知れねえが、悉皆り借金を返し切つて又三年でも五年でも稼がなけりやア、百両の金を持つて、娘の身請を為に往く事が出来ねえ、あゝ何んでも斯んでも娘を女郎にするのだ、仕方がねえ、其代り己の娘が悪い病を引受けませんやう、朝晩凶事なく達者で年期の明くまで勤めますやうにと、お前心に掛けて、ふだん信心する不動様でも、お祖師様でも、何様へでも一生懸命に信心して遣つておくれ。男「何う致しまして左様な金子は要りません。長「己だつてさ遣りたくも無えけれどお前が死ぬといふから遣るてえのに、人の親切を無にするのけえ。と云ひながら放り付けて往きました。」

長兵衛がお久の作つた百両を懐にして吉原から吾妻橋まで行

きかうまでは、「大門を出て土手へ掛り、山の宿から花川戸へ参り、今吾妻橋を渡り掛ると、空は一面に曇つて雪模様、風は少し北風が強く、ドブンドボンと橋間へ打ち附ける浪の音、真暗でございます」と描写されている。この落語の背景になつてゐる季節は具体的に描かれてはいないが、最後の方で文七の店の主人が長兵衛に向かい、「今年からお供の取遣りを致します、明日あたり餅搗きを致しますから」と言つてゐるところから、正月が間近い師走であることが推測される。

「野分」の書かれてゐる季節は、高柳が「百両を懐にして室のなかを二度三度廻る。気分も爽かに胸も涼しい。忽ち思ひ切つた様に帽を取つて師走の市に飛び出した」という記述があるように師走である。

そうすると、高柳が「師走」の「暗き夜」の晩白井宅に「百両」を置いて帰つたことは、「文七元結」で長兵衛が「師走」の「真暗」な晩文七に「百両」を「放り付け」たことに呼応してゐる。しかもその金は、一方が療養のためのものであり、一方は身が売られてのもので、いずれも身体が代償にされてゐるのが共通してゐる。

円朝の「文七元結」は、「野分」が発表される十八年前の一八八九（明治二十二年）四月三十日から五月九日まで「やまと新聞」に酒井昇造速記、月岡芳年画として連載され、同年六月金桜堂から刊行された。また「野分」が発表されたのとは同時期の一九〇七（明治四十一年）二月一日の「文藝俱

「樂部」十三卷三号に三遊亭円右の「文七元結」が掲載されている。この速記収録本<sup>⑤</sup>の演目解説では、「文七元結」を発表した円朝自身が「これから二年後の明治二十四年六月、事情あつて、一時、寄席から退隠しているのので、この嘶を口演する機会はすくなかつたらしく、門下の四代目円生が、さかんに高座にかけてみがきあげ、これを弟弟子の一朝が継承して」いたとしている。だから漱石は、刊行本の『文七元結』を読んでいたか、円朝の弟子たちが高座で演じていたものを聞いていたことが考えられる。

3

「野分」発表の翌年、一九〇八（明治四十一）年九月一日から十二月二十九日まで、漱石は東京朝日新聞紙上に長篇小説『三四郎』を連載した。周知のごとく、この作品中で漱石は、柳家小さんと三遊亭円遊の比較論を展開し、日本橋の木原店という寄席のことまで記している。つまり落語と深く関わった小説であることは論をまたない。

このうち一章で、汽車で乗り合わせた女と三四郎が名古屋の宿で同室となり、一枚の蒲団で一緒に寝るシーンがある。すでにこの部分は、興津要が落語「宮戸川」からの影響を指摘している。

以上の状況設定の原型は、三代目春風亭柳枝の「宮戸川」

（『百花園』明23・11・20）における、お花、半七の同衾場面にあると見られる。すなわち、

「お前さん、其処等へ勝手にお寝なさいナ、物置の隅でも何でも宜いと云つたんだから、私は伯父さんの家だから蒲団の上に寝ます。夫でもなんです、貴嬢が風邪でも引くとお隣づからで、阿父さんに悪るう御座いますから、成丈け私の方へ寄らないやうにして、お寝なさい、抱巻を半分貸しますから。半分きやア貸しませんヨ。此蒲団の縞の境界にして、成丈け縮小成つて寝て下さい……」と何時となく寢床へ這入りましたが、お互に若い同志で、体裁が悪いから、初の内は背中合せに寝ました。

というのがそれで、純情な三四郎のなかに、お花、半七のういういしさの投影があつたことは否定できない。<sup>⑥</sup>これと同様なことは越智治雄も言及し、「宮戸川」と『三四郎』の例は思いつきの域を出ないが、あなたがちに否定できないし、漱石の内部に落語が生活感覚のようなかたちで生きていたらしいことに思い到ると、問題はかなり大きなものになつてくる」<sup>⑦</sup>としている。

確かに『三四郎』と「宮戸川」の関連は「思いつきの域を出ない」かもしれないが、引用した先行論文には『三四郎』と「宮戸川」をつなぐ大きなことがひとつ見落とされているように思われる。三四郎が宿で下女から宿帳を求められ、仕方なく本名を書き込む。しかし出会ったばかりの女の名前は

知らない。やむをえずでたらの名を「花」と書いて、下女に手渡した。ここで三四郎が書いた名前の「花」は、やはり「宮戸川」の「お花」から意識された名の「花」だったのである。漱石自身このシーンは、ある程度読者に「宮戸川」を連想されることを前提に書いていたことも想像される。それだからこそ二章で、与次郎の口を通して小さんと円遊の落語家論を力を込めて書きつづっていることも納得される。

一九一一年（明治四十四）年に発表された漱石の唯一の小説に、七月二十五日から三十一日まで東京朝日新聞に連載された短篇「手紙」がある。内容は、縁談の話をつけに「自分」が地方にいる重吉という人物に会いに行くもので、重吉不在の部屋で重吉宛の艶書を「自分」が見つける場面がある。

翌朝顔を洗つて室へ帰ると、棚の上の鏡台が麗々と障子の前に据ゑ直してある。自分は何気なく其前に坐ると共に鏡の下に櫛を取り上げた。さうして其櫛を拭く積か何かで、鏡台の抽出を力任せに開けて見た。すると浅い桐の底に、奥の方で、何か引掛る様な手紙がしたので、忽ち軽くなつて、するくと、抜けて来た途端に、捲き納めて振れたやうな手紙の端が筋違に見えた。自分は引手

繰るやうに其手紙を取つて、直五六寸破いて櫛を拭かうとして見ると、細かい女の手紙で白紙の闇を辿ると云つたやうに、細長くひよるひよると何か書いてあるのに気が付いた。

この部分は、落語「文違い」（別題「自称情夫」）で、遊女お杉に部屋で待たされイライラしている半ちゃん（セリフ）を思ひ出させる。

彼畜生は何をして居るのだな。煙草の箱を持つて行きやがつて夫れ限り鉄砲玉で、何時まで饒舌つて居るのだな……エー……煙草の箱の上の引出しに何か這入つてると見えて恐ろしい固いな。種々な物が這入つて居るな……オヤ……詰みが取れて仕舞つて。何だ、中には辻占だの、下らない、オヤ……手紙が出やがつた。男の手だな……見て遣れ。

「女の字」と「男の手」との違いはあるが、ともに無人の部屋で相手の現れるのを待つ身が箱の引き出しを開けて中に入っていた手紙をこっそり見るという趣向が一致している。

「手紙」にはこの後に、中味をあらためるくだりが続く。艶書だけに一方から云ふと甚だ陳腐には相違ないが、それが又形式の極らない言文一致で勝手に書き流してあるので、随分奇抜だと思ふ文句がひよいひよいと出て来た。ことに字違ひや仮名遣が眼に付いた。夫から感情の現はし方が如何にも露骨でありながら一種の型に入つてゐる

といふ意味で誠が却て出てゐない様にも見えた。最も恐るべく下手な恋の都々一なども遠慮なく引用してあつた。凡てを綜合して、書き手の黒人である事が、誰の眼にも何より先にまづ映る手紙であつた。

「型に入つて」「都々一など」が引用されている手紙という、落語「三枚起請」の起請文が思い浮かぶ。四代目橘家円喬口演の速記<sup>⑬</sup>には、「一つ起誓文の事……御前様と夫婦の契約……文句はありきたり、斯ういふことがあるもんで」のセリフがあり、「第一昔から、朝帰りの時に嘘の起誓を書く時には熊野の鴉が三羽死ぬといふぢやアねへか……外に新趣向は花魁、無へのか」「熊野の鴉が三羽何うとやらいふてやが、和娼は熊野所ぢやおまへんぞ。世界中の鴉を皆殺さうと思ふて居ますぞ」「何ういふ訳で……」「和娼かつて務めの身ぢやもの、朝寝がしたいのぢや」でサゲている。速記収録本<sup>⑭</sup>の演目解説には、このサゲは、「倒幕の志士高杉晋作が、品川宿の土蔵相模あたりで遊興中に作つたという都々逸、「三千世界の鳥を殺し、主と朝寝がしてみたい」を落ちに使つたものといわれる」とある。熊野牛王宝印とするされた護符に書かれるのが起請誓紙の起請誓文だが、落語「三枚起請」は、したたかな遊女が三人に同じ起請文を書いて、それが露頭する。漱石が「手紙」を書いた際に、「女の字」をこの起請文とオーバーラップさせていても不思議ではない。

漱石の弟子の野村伝四は、漱石と落語のことでこんなエピソードを残している。

その頃の東都落語界の状況を申すと、普通の寄席で他の芸と一所に聞くのでは、時間に制限されて、充分に味はう事が出来ぬ。それでは落語家諸君も力抜けがして、自然自棄になるだらうと云ふので、斯界の同情者の肝煎りで、落語ばかりで他を交へない落語研究会と云ふのが出来たのであり、その第一回は蔵前の何とかと云ふ寄席で催された。而して私は其会に先生に誘はれて行つた。之が私が落語を耳にした最初で、私はこの席で始めて、円左、円右、円蔵、小円朝、馬楽、小さんと云ふ面々の至芸を楽しんだものだ。<sup>⑮</sup>

野村のいう第一回落語研究会は、一九〇五（明治三十八）年三月二十一日に日本橋の常盤木倶楽部で開催されていた。この時の出演者の出演順と演目は、三遊亭円左「子別れ」、三遊亭小円朝「文違ひ」、橘家円喬「夢金」、三遊亭円右「妾馬」、円左「富久」（三遊亭円遊の代演）、橘家円蔵「田能久」、柳家小さん「小言幸兵衛」であつた。<sup>⑯</sup>

「手紙」を書く六年前にさかのぼるが、漱石は野村を引き連れて第一回落語研究会をのぞきにいき、確かにそこで小円朝演ずるところの「文違ひ」<sup>⑰</sup>を聞いていたのである。

## おわりに

越智治雄は、「漱石は『三四郎』以後、落語との関連をうかがわせなくなったが、『明暗』に「ブック、オフ、ジョークス」といった書物が出てくるのを見ると、やはり一筋の糸はつづいていたようだ」<sup>(8)</sup>と述べ、最晩年まで漱石が落語に関心のあつたことをおわせている。

しかし、指摘されるように、漱石が明らかに落語から引用したり、あるいはヒントを得て作品に取り込んでいたのは『三四郎』までで、それはそれまでの作品にかなりの部分文明批判が込められていたことと無縁ではあるまい。文明批判を作品化する場合、漱石は落語が有効に作用すると考えていたのではないだろうか。『三四郎』が書かれた以降、文明批判が表面立つて出て来る小説が影を潜めたことも、それは一致している。

その中で、短篇「手紙」は、落語の要素を残している例外的な作品の一つとなるが、その文明批判との関わりについては、別稿に譲ることとする。

## 注

- (1) 桜楓社一九七〇年二月二十日
- (2) 平凡社二〇〇〇年五月十五日
- (3) (1)と同じ

- (4) 江藤淳『漱石とその時代』第三部（新潮社一九九三年十月二十三日）

- (5) 『百花園』二百三十九号、明治三十三年十月三日（講談社『口演速記明治大正落語集成』第五卷一九八〇年九月二十日）

- (6) 創元社一九八〇年十一月一日

- (7) 三遊亭円生『寄席育ち』（青蛙房一九七六年六月十日）

- (8) 『明治の文学第三卷三遊亭円朝』『文七元結』（筑摩書房二〇〇一年八月二十五日）

- (9) 『口演速記明治大正落語集成』第六卷（講談社一九八〇年十二月十二日）

- (10) 興津要『漱石と江戸』（有斐閣『講座夏目漱石』第五卷一九八二年四月二十五日）

- (11) 越智治雄『漱石と「蒟蒻問答」』（砂子屋書房『漱石と文明』一九八五年八月十日）

- (12) 四代目橘家円蔵口演『百花園』二百五号、明治三十年十二月三日（講談社『口演速記明治大正落語集成』第四卷一九八〇年七月三十日）

- (13) 『百花園』十四卷百三十六号、明治二十七年十二月二十日（講談社『口演速記明治大正落語集成』第三卷一九八〇年六月十五日）

- (14) (13)と同じ

- (15) 野村伝四『散歩した事』（岩波書店『漱石全集』昭和十年版昭和十二年二月十日、岩波書店『漱石全集』別巻一九九六年二

月六日)

(16) 暉峻康隆『落語の年輪』(講談社一九七八年三月二十五日)による

(17) このネタを収録している『円生全集』第四卷(青蛙房一九七二年九月十日)の「輪講文違い」で、三遊亭円生は明治三十八年に演じられた「文違い」のことを述べている。「円喬さんが、明治三十八年創立の第一次落語研究会でこの哢を演ったんですが、日向屋の半七が手紙を読むところがありますね『あッ、畜生』と言うところがありますが、その呼吸が実によかったんですッてね。初代の円左さん、名人と言われたこの人が楽屋で聞いていて、思わず『うまいッ』と、大きな声を出したそうです。円喬さんが楽屋へ帰ってからあやまったそうですが、ほめられたんだから、円喬さんとしても悪い気持はしない。それくらい円喬の『文違い』はよかったんでしょうね」(ここでは円喬

が「文違い」を演じたことになっているが、記録では小円朝がやり、円喬は小円朝の後に「夢金」をやっている。「うまいッ」と叫んだ円左は、小円朝の前に高座を下りているので楽屋で「文違い」を聞いていたことは想像できる。ここで述べられていることは、円生が落語家の誰かから伝え聞いたことであるが、その際小円朝と円喬の名を聞き違えたか、あるいは記憶違いがあつたのであろう。ともあれ、楽屋内でも良い出来といわれ続けていたほどの「文違い」を、漱石はその日、寄席で間違いく耳にしていた。

(18) (11)と同じ

【付記】漱石作品の引用はすべて『漱石全集』(岩波書店一九六五年版)に拠り、ルビは省略、旧漢字は新字体に改めた。

(おんだまさかず／本学大学院博士前期課程)